

今、求められる 「書くこと」 の指導

PISA（学習到達度調査）や全国学力・学習状況調査で、思考力・判断力・表現力を問う記述式設問に課題があることが浮き彫りとなりました。そういった状況を受け、記述力の育成がますます求められています。今、子どもたちに身に付けさせるべき「書く力」とは何か、そのためにどのような指導をすべきか―。

本特集では、「書くこと」の指導を長年研究・実践されてきたお二人の先生にお話を伺い、今、求められる「書くこと」の指導を考えていきたいと思います。

早稲田大学留学センター 准教授
佐渡島 紗織
愛知教育大学 講師／
元 豊田市立拳母小学校 校長
松山 美重子

対談

アメリカでライティングを学ばれ、「書くこと」の指導を研究されてきた佐渡島先生と、現場で多くの魅力的な実践をされてきた松山先生に、今、求められている「書くこと」の指導について、お話をいただきました。

② 説明的な文章を書く力

松山 佐渡島先生は、大学でライティングの指導をされていますが、大学生にはどのような書く力が求められていると思いますか。
佐渡島 大学で、レポートや論文の書き方を教えているのですが、そういう文章を書くことに慣れていない学生がとても多いのです。ですから、学術的な文章を書く力をしっか

り、説明文、観察記録文、調査報告文……とたくさんあります。

これは、何を意味しているのかというと、これからは、他教科や日常生活に生かされる表現様式を子どもにきちんと身に付けさせなさい、ということなのだと思います。

佐渡島 二十年前の教科書の作文単元を見ると、「運動会について書きましょう」と、題材だけが指定されていて、相手や目的がはっきりしていません。でも、十五年くらい前から、短作文、コミュニケーション作文というのが出てきて、そこではいろいろな相手や目的が設定され、それに応じて書くことが求められました。そして、新しい学習指導要領では、相手や目的に加え、表現様式も設定されるわけです。

松山 でも、残念ながら「遠足に行ったから遠足のことを書きましょう」といったありがちな作文指導もまだ行われているのではないのでしょうか。

そういった意味で、今年の全国学力調査は、今後の課題を投げかけたように思います。A問題には「実験報告文を書く」という問題があり、B問題には「調査報告文を書く」という問題がありました。表現様式をきちんと学習していないと、子どもたちはこの問題に対応できません。

佐渡島 表現様式の指導については

り身に付けてほしいと思います。その力は社会人になってからも、大いに役立ちますから。

松山 大学生になってから学術的な文章を書くように、小学生のうちから「説明する文章」「報告する文章」などの説明的な文章をきちんと指導したいですね。

佐渡島 ええ。小学校から積み上げて練習しておいてほしいなと思います。

松山 以前、中学三年生の理科の授業を見て驚いたことがあります。先生が「エネルギーの変化について考えるために、実験をしてそれをワークシートにまとめてグループ内で報告しましょう」という学習課題を出したのですが、生徒のワークシートを見てみると、「コイルを巻いたら、熱で空気が膨張してフタが飛んだ」と、それしか書いていないんです。

佐渡島 結果だけが書かれているんですね。

松山 でも、先生は「エネルギーの変化について考えるために報告しましょう」と言っただけです。ですから、まず「何を調べるために実験をする」という「目的」を書かなければいけない。次に実験の「方法」を書いて、その後で実験の「結果」を書く。最後に、フタが飛んだかどうかのかという「考察」を書かなければいけない。少なくともこの四つの段階を書く必要があるの



③ 表現様式を身に付けさせる

松山 新しい学習指導要領の「書くこと」の言語活動例には、さまざまな文の表現様式が登場しています。説明的な文章だけで

小学生のうちから

「引用」の意識をもたせたいですね。

一九八〇年代に、アメリカやオーストラリアで面白い論争（※）がありました。「作文は個々の状況に規定されているので、様式に分類することは不可能である。相手や目的に応じて書くという指導だけをすればよい」という一派と、「案内文・お礼状……というふうな文章の種類を機能によって分類して指導したほうが、表現技能を身に付けさせることができる」という一派が、論争を繰り広げたんです。

松山 その論争は、どのように終結したのですか。

佐渡島 じつは、まだ終結していません。けれども、実際にわたしたちが文章を書く状況というのは、両派の中間に位置していると思うんですね。つまり「典型的」なお礼状の書き方を知った上で、状況に合わせて調節して書くという。両派の一つの妥協点もそこでした。学校では、典型を教えて、その典型から調節できるように指導するのが妥当なのではないかと。

松山 そういった典型といいますが、文章の表現様式は小学校から身に付けさせない

ればいけない。そのことを、しっかりと意識する必要がありますね。

②「引用」を意識させる

佐渡島 大学生を指導していて気になっているのが、自分の意見と、書物に書かれている内容とを、きちんと書き分けられない学生が多いことです。ですので、大学では引用や参考文献の示し方を、改めて教えています。

松山 新しい学習指導要領では、高学年の指導事項として「エ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書くこと」とありますが、小学校段階から、引用の書き方はしっかり指導しなければいけませんね。

佐渡島 大学生のレポートを読んでいて、文章表現が途中から変わっていておかしいなと思うと、インターネットで見つけた文章をコピーペーストしているということがあります。学生には、「これは剽窃（ひょうせつ）にあたります。他人の文章を盗んだことと同じで

松山 なるほど。低学年で「引用」を意識するのは難しいですが、参考文献を記すくらいはできるかもしれませんね。何を参考にしたか明らかにする姿勢というのは、情報化社会の中では大事になってくると思います。

③教科書教材で育てる「書く力」

佐渡島 松山先生は、「書くこと」の面白い実践をたくさんされてきたそうですね。

松山 伝える目的によって表現様式を明確にして書く、ということでは「すがたをかえる大豆」(三下)を使った実践でしようか。

この教材は、大豆がどうすがたを変えていくかという面白さに着目して、大豆のすごさを紹介しています。この教材を使って、「みんなに教えよう！野菜のすごさ」という実践をしました。自分の好きな野菜を友達に伝えようというものです。

表現様式を身に付けさせる場合、形式的な指導になりがちですが、わたしは、子どもたちの興味や目的意識を大切にしながら

指導しなければいけないと思っています。

この実践では、たとえばピーマン好きの子が、「ピーマン嫌いの子をピーマン好きにさせたい」というワクワクした思いで、取り組みました。

佐渡島 いいですね。「ピーマンの魅力を知らない子に教えてあげよう」というのは、「何を」「誰に向けて」「どうするか」という題材・相手・目的がしっかり設定されています。これはとても重要です。それらがそろったときに初めて、子どもたちは「こういうふうな書くこう」と表現を選ぶことができるんですよ。

松山 この実践では、「変身！野菜ブック」という野菜の紹介文を書かせたのですが、子どもは楽しみながら取り組んでいました。「すがたをかえる大豆」にならって、まず野菜の概要を述べてから、野菜の特徴を紹介する。その中で、おいしい野菜の料理の作り方を説明する、という構成で書かせます。

この「野菜ブック」には「野菜のすばらしさを調べて紹介する」とのと、「料理の作り方の手順を説明する」という二つの要素

すよ」と、厳しく注意するんですが、学生は「自分はそんなに大変なことをしたんですか」って驚くんです。ですから、小学生のうちから、「引用」の意識をもたせることは、大事だと思います。

松山 その通りだと思います。

佐渡島 以前、アメリカの小学校で二年生の作文の授業を見学したのですが、先生が子どもたちに参考文献を書くように指導していて、とても驚きました。やっと文が書けるか書けないかの子どもでも、何かを参考にしたときには書籍名と著者名を記すように指導する。参考文献を用いて書く際の基本的な姿勢を教えているのだなと思いました。

が入っています。

佐渡島 「作り方の手順を説明する」というのは、この教材には入っていない要素ですね。

松山 そうですね。でも、「作り方の手順」というのは、低学年で学習しているんですけど例えば、「一本の木」(二下)で、木の絵を描く手順を「まず、くみきを かきます。」「つぎに、くえたをかきます。」というように、順序に気をつけて説明文を書く学習をしています。

佐渡島 なるほど。低学年で学習した書く力が、この活動に生きているんですね。

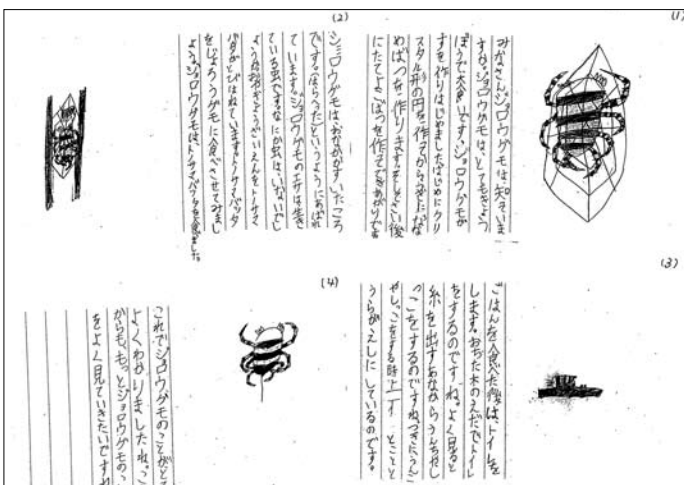
松山 そうです。また、この学習では子どもはどうして「交流」ができます。先ほど、

まつやま みえこ 松山 美重子

愛知県生まれ。愛知教育大学講師。愛知県教育委員会義務教育課指導主事、豊田市の公立小学校校長を歴任し、現職。三河教育研究会国語部会長や愛知県女性校長会会長を務めるなど積極的に活動し、その授業実践には定評がある。著書に「ことばの力を身につけるおもしろ体験ワーク」(共著・明治図書)などがある。

さどしま さおり 佐渡島 紗織

神奈川県生まれ。早稲田大学留学センター准教授。1998年米国イリノイ大学でPhDを取得。その後、国立国語研究所研究補佐などを経て、現職。研究分野は国語教育で、特に「書くこと」の指導と評価を調査・研究している。著書に「これから研究を書くひとのためのガイドブック」(共著・ひつじ書房)などがある。



佐渡島先生もおっしゃいましたが、「教えてあげよう」という目的がはつきりしていますので。

佐渡島 新しい学習指導要領にも「交流」

という言葉が新たに登場しましたよね。これからますます求められる活動だと思っています。

松山 そうですね。交流の方法としては、書いた文章をもとに感想交流会や意見交流会をすること、発表や展示をして批評や助言をし合うことなどが考えられます。「交流」は、書くことの目的を明確にするために有効に位置付けるようにしたいものです。

⑨ 書くために読む

松山「大造じいさんとガン」(五下)では、読書交流会をするために読もう、という実践をしました。椋鳩十の別の作品を読んで、そのテーマと、「大造じいさんとガン」のテーマを比べるとという、テーマ読書交流会をしたんです。

佐渡島 具体的には、どのように行ったのですか。

松山 作品のあらずじ、登場人物の人物像
自分が考える作品のテーマなどを読書カ
ードにまとめさせ、それをもとに交流会をし
ました。

それにはまず、全員で「大造じいさんとガ

観察記録文でいえば、「たんぼのちえ」(二上)を使って、「絵本で知らせよう、マイこん虫記」という観察記録文を書く実践をしたことがあります。

佐渡島 昆虫記を書かせたんですか？

松山 ええ。「たんぽぽのちえ」は優れた教材で、筆者がどこに目をつけて、どのよう
に観察しているかがとてもわかりやすく
書かれているんですね。

「たんぽぽのちえ」は「花びら」「くき」

ン」の読書カードをつくってみる。そうすると、「大造じいさんとガン」を読む目的が、読書カードを書くために読む、ということになります。あらすじを百五十字程度でまとめるにはどうすればよいのか、大造じいさんはどのような人物なのかなどを考えながら読むわけです。

佐渡島 「書かれ方」を読んでいくんです。

佐渡島「書かれ

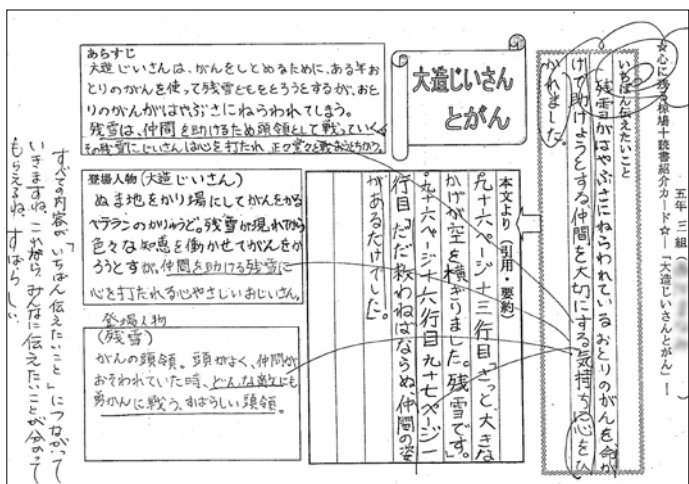
んですね。

松山 そうです。「読むこと」を「書くこと」とにつなげるというのは、大事なことだと思えます。PISAの結果からも、「目的的に読む」ことの必要性が言われています。これからは「書くこと」を、「読むこと」や「話すこと・聞くこと」といった別領域に生かしていくような指導が求められると思います。

思います。

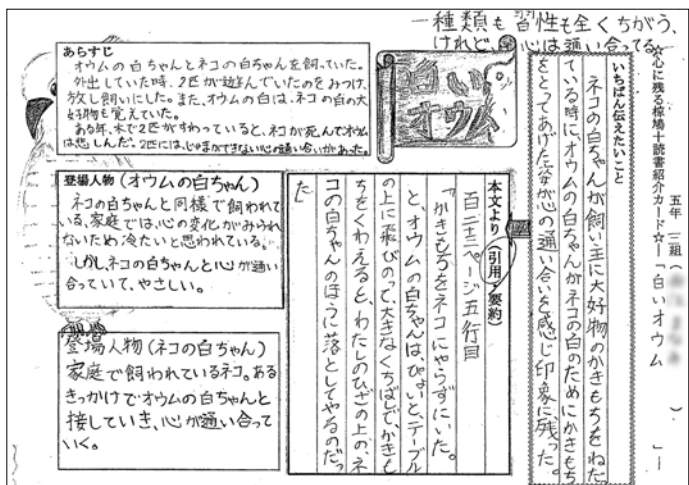
というようにきちんと段落構成がされている。昆虫でいえば、「体のつくり」「すみか」「えさ」という、視点を分けて書くという学習になります。また、昆虫記を書かせる際には、『幼年版 ファーブルこんにちは』（あすなろ書房）も子どもたちに紹介しました。それによつて、ファーブルの観察の姿勢を子どもがまねて、昆虫のえさの食べ方や、巣のつくり方をじっくりと観察するんです。

るんです。



◀ 「大造じいさんとガン」の読書カード

◀ 椋鳩十の別の作品「白いオウム」の読書カード



⑤ 他教科や生活場面に生かす「書く力」

佐渡島 書く力は、別領域だけでなく、他教科にも生かせそうですね。

松山 はい。先ほど、中学三年生の理科の授業の話をしましたが、報告文、観察記録文などの「書くこと」は、理科・社会・総合的な学習の時間で、頻繁に使いますよね

佐渡島
これだけ絵が描けているというこ

とは、一生懸命観察していたんでしょね。

松山 ええ。そして観察した内容を段落に分けてきちんと書いている。これは、理科を学ぶときにも生きると思います。

を学ぶときにも生きると思います。

佐渡島 理科や社会では、調べ学習などの調査報告をよく行いますが、調査報告には二つのパターンがあることをおさえておくと、指導しやすいと思います。調べ学習のように、資料だけを使って調査する方法と、自分でデータをとって調査する方法の二つです。

資料だけを使って調査報告する場合、集めてきた資料がどこにあつたものなのか、後で読者がたどれるように書くことが重要です。自分でデータをとって調査報告する場合、自分で現場に行つて観察したり人と話をしたりしますので、この流れを、先ほど松山先生がおっしゃつた中学三年生の理科の報告文のように、目的・方法・結果・考察・結論という一定の型に沿つて記述します。

結論という一定の型に沿って記述します。

松山 教科書教材でいいますと、前者は「食べ物のかせになろう」(三下)で、後者は「生活を見つめて」(四下)ですね。

佐渡島 小学校の先生は、全教科教えてい

ることが多いですから、ぜひ理科や社会の時間にも調査報告のパターンを意識して指導していただきたいです。また、「書くこと」は生活場面でも生かれますね。

は生活場面でも生かされますね。

「書くこと」というのは、

思考力を鍛えるのにいい領域だと思います。

松山 学校のあらゆる生活場面で生かせると思います。たとえば、廊下の掲示物を見ると、その学校がどのように「書くこと」を指導しているのがわかります。

「おすすめの本の紹介コーナー」で、「こんな本があります。面白いので読んでください」とだけ書いてあるのと、あらずじ、面白さのポイント、キャッチコピー、登場人物紹介などをふまえて書いてあるのとでは違います。

佐渡島 掲示物ひとつ見ても、指導の違いが表れているんですね。

松山 先生方には、日常生活でも「目的に応じて書くこと」を活用する場面を、意図的につくってほしいと思います。

佐渡島 そして、活用場面をつくるだけでなく、指導もしっかり行っていた方がいいですね。

◎「書くこと」で思考力を養う

佐渡島 よく大学生にも話すのですが、「書くこと」と「考えること」は一体だと思う

んです。書く作業は、頭にある考えを表現しているだけだと思いますけど、実はそうではなくて、「考えるために書く」ということもあると思います。わたしは、学生に「言語論的転回」という考え方をよく強調して話すんですよ。

松山 「言語論的転回」というのは、どういうことですか。

佐渡島 たとえば日本人は、「赤」といつても、えんじ、朱色、れんが色、真つ赤と、色を表現するたくさんの方の言葉をもっています。日本人にそれらの色を見せて、「これらは同じ色ですか、違う色ですか」と尋ねると、「ぜんぶ違う色です」と答えるでしょう。しかし、「赤」という言葉しかない国の人には尋ねると「すべて同じ色です」と答えます。これは、日本人が色を識別する能力が高いわけではなく、さまざまな「赤」を説明する言葉があるから違う色だと認識する、と考えられます。

このように、わたしたちは使いこなせる言葉の範囲でしか思考できないという考え方が、「言語論的転回」です。豊かに言葉

先生にさまざまな実践をご紹介いただきましたが、その中で、子どもどうしが文章を読み合ったり、文章をくり返し書き直したりすることで、言葉の使い方をじっくり検討する力が育つんですよね。

◎今、求められる「書くこと」の指導

佐渡島 よく現場の先生方から「書くこと」は評価が難しいとお聞きます。わたしは、書かせることの目的を絞って、評価の観点を思いきって絞っていけばいいのかなと思っています。

「こういう目的の文章です、だからこれができるいれば○にします」と。その代わり多くの機会を設ければ、評価も難しくなるのではないのでしょうか。

松山 そうですね。そうように焦点化することは大事だと思います。書くことが好きな子は、原稿用紙十枚くらいを一気に書いてしまいます。だからといって高く評価できるわけではありません。学年と表現様式

から書くべき文字数を設定して、その文字数でどう構成するのか。そういう書く力をつけさせることが大事なんです。評価も身に付けさせる能力を明確に行うべきです。

また、「書くこと」を教えるときは、取材して、構成メモを書いて、記述して、推敲して……あれもこれもやろうとしがちです。しかし、新しい学習指導要領で具体的な言語活動例が示されたことを考えても、活動を焦点化することは大事ですね。

佐渡島 書く活動を焦点化し、評価も焦点化するということですね。

松山 それから、観察記録文でいえば、一年生では観察記録を簡潔にここまでやりました、二年生では「たんぽぽのちえ」を参考にして観察対象を詳しく見て段落をつくって文を書きました、というように、指導の系統性を意識して少しずつ積み上げていくことが大切だと思います。

佐渡島 「書くこと」の指導は、「焦点化する」とことと、「積み上げる」とこと、といえるそうですね。

を使えるようにすることは、

思考そのものを鍛えることな

んですね。ですから、いい考えを

もっている人が、自然といい

文章が書けるわけではなくて、

文章をよくしていくことで、考えているこ

とまでが、深く確かになってくるんです。

松山 思考力を「書くこと」で育てるといのは、新しい学習指導要領にも示されていますね。

佐渡島 各学年の目標を見ますと、思考力育成の視点が盛り込まれているなと思います。特に低学年では「簡単な構成を考えて文や文章を書く能力」とあります。低学年から構成を意識させるというのは、思考のパターンが強調されているのかなと思いました。

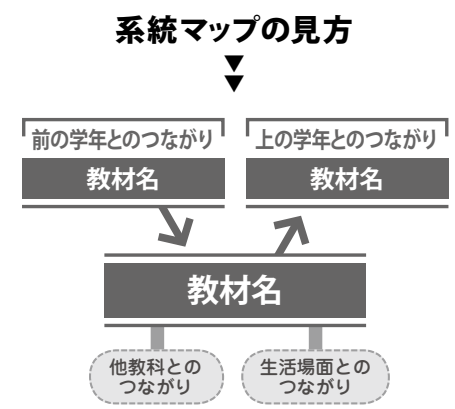
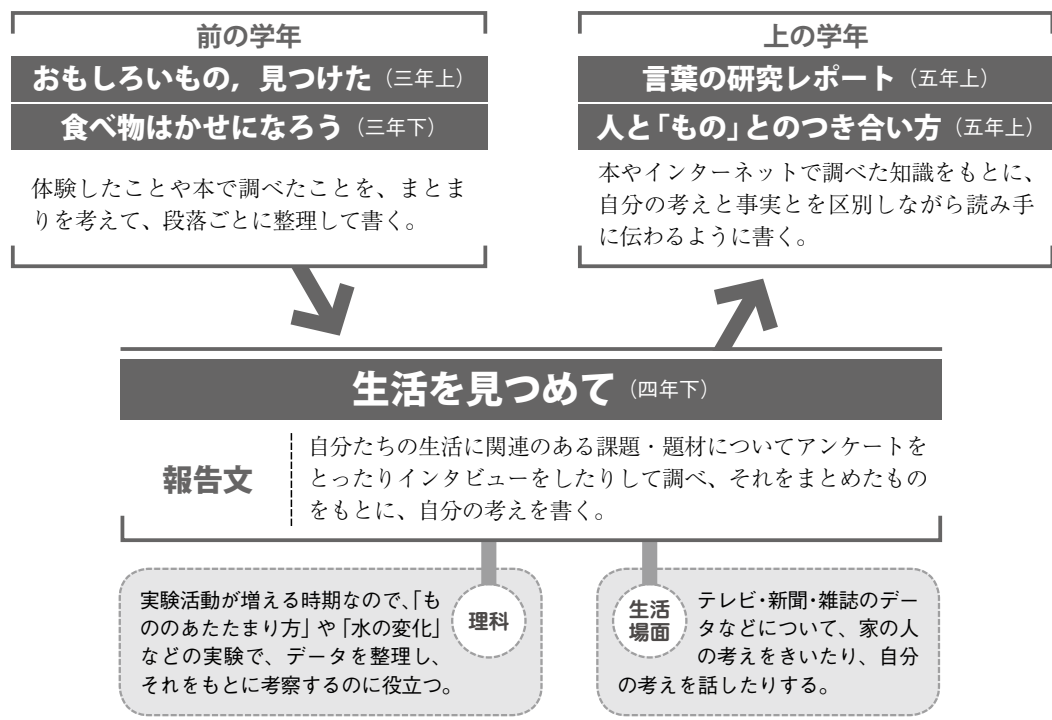
松山 教科目標にも「思考力や想像力及び言語感覚を養い」とありますね。

佐渡島 「書くこと」というのは、思考力を鍛えるのにいい領域だと思います。松山

最近、大学生と接していて気になるのが「卒業後に何をしたらよいのかわからない」と思っている人が多いことです。もって社会とのかかわりを感じて、社会に対して自分の意見をもってもらいたいんです。そのためにも「書くこと」は直近の領域だと思っています。「書くこと」で自分や社会への認識を深めていきますから。

松山 そういうふうに「書くこと」をとらえて、小学生のうちから指導していきたいですね。表現様式や引用などについてお話ししましたが、それらをきちんと身に付けると、自分の考えが明確になりますし、「書くこと」に抵抗がなくなります。子どもたちが「書くこと」の学習を通して、自分の考えを深め、もって書いて伝え合いたいと思ってくれるといいなと思いますね。

「書くこと」で自分の考えを深めて、
もって書いて伝え合いたいと思っしてほしいですね。



「書くこと」教材 系統マップ

元新宿区立西戸山小学校教諭
やす だ きょう こ
安田恭子

各学年の「書くこと」教材を使った学習が、実際に他教科のどんな学習とつながるのか、生活場面にどう生かせるのか、また他学年の「書くこと」教材にどうかかわるのか、低・中・高学年で一つずつ例示しました。他の教材を指導される際にも参考にしてみてください。

